

万葉思^{しの}ひ草 十三

——解釈迷執「ふふむ」——

升 田 淑 子

古語は古典に学べと提唱し、みだりにひがごとを述べるを厳に戒めた契沖、賀茂真淵、本居宣長など、江戸期には古道への復古を推究した国学者たちが輩出した。真淵は『倭名類聚鈔』をもって古典研究正道の下限と位置付けたが、このような趨勢によって古語、わけても『万葉集』の解釈学は画期的な進歩を見せ、研究の礎柱として今も重い。

契沖は、『万葉集』研究に入る契機となったのは、母親の、まずよく『万葉集』を学べという教えにあったと回顧している。母は間七太夫の女で、小倉細川忠興に八百石で仕えた武家の出であった。新井白石の母もそうであったように、武家の女の教養の高さが子に及ぶことがしばしばあった（池田利夫「契沖注釈の生成」『契沖研究』所収 一九八四・一 岩波書店）ようである。契沖は、母親の死後、折にふれて思い出し涙していると書いており、その影響が強かったことが偲ばれる。「断機之戒」「三遷」の、孟母ほどの逸話が揃っているわけではないが、母親の一言が『万葉集』研究を大きく動かしたのである。学問として体系化される文献学の埒外から立ち現れて来る『万葉集』への親密な愛は、古語たる由縁を失いかけている古代語を、掬水する力を啓かせる。それは、古代へのある種母性的な抱懷から、ふと立ち止まって、復古への道を辿ってみたいと思わせるような古代語との遭遇である。「ふふむ」は、そのような語の一つである。現代語訳ではすでに「つぼみ（蕾・蒼）」「つぼみの状態」で落着いている語なのであるが、その解釈には古代語の感覚が共鳴するのを拒むような異和感を覚えてしまう。少しくこだわってみたい語として、しばらく迷執しようと思う。

春雨を待つとしあらしわが屋戸の若木の梅もいまだ含^ふめり（卷四―七九二 藤原朝臣久須磨）

契沖は右の歌の「含めり」を、『万葉代匠記』初稿本では旧訓の通り「くゝめり」と訓んでいるが、後に精撰本で「フ、メリト読ヘシ」と改め、「フクムヲフ、ムト云ヘルハ古語ナリ。花ノフ、ムト云ハツホムナリ。」と解釈している。「フクム」は、「含む」の意で、「フ、ム」はこれの古語であると言う。そして「くゝめり」も「フ、ム」もその意は「つぼむ」であると説明している。が、この解釈に対しては異和感を覚えている。若木の梅が咲く時として今かと春雨を待っているという希冀なる様態を「ふふむ」にいるというので、いわゆる「つぼむ（窄む）」を意味する「ツホム」というのは語感が合わない。雨に会うのを花開く時の徴として待ちこがれているようだと見ている万葉歌の、積極性に富んだ明朗な気持ちに、「つぼむ」の意味が適わないということである。それは、主観的にではなく、『万葉集』に「つぼむ」が一例も見られないこととの関係にも由来している。契沖の説くのは決して特別なものではなく、これが諸注で一般化されている解し方なのであるが、「ふふむ」は考えているよりもはるかに古代語であり、特有の感覚に立つ語であったのではなからうか。この二つの語が何の疑念も持たれず、無造作とも思えるようなある種の整合を早くから果しているのに対して、解釈そのものに対する現代性と古代性ということとをあらためて問い直しながら考えてみたいと思うのである。

わが背子が古き垣内の桜花いまだ含めり一目見に来ね（卷十八・四〇七七 大伴家持）

右の歌は、「あなたの旧宅の垣根の中の桜の花は、まだつぼみです。一目見にいらっしゃい。」（『万葉集全訳注原文付』中西進 講談社文庫 傍点筆者）と訳されている。この歌の光景を頭に思い描くならば、先の梅のように、桜の花がまだ蕾を持っていて、かすかに花の色を匂わせている位のところを絵のようにたどることができる。しかし、それは平面的な風景画に仕上げるだけで、立体的な作者の言葉の絵にはならない。家持が何故、まだ咲いていない桜をわざわざ早く来て一目見なさいと誘ったのかを考える時、「一目見に来ね」の言葉から張り出してくる力が、「蕾」という合理的、形式的な「概念の常識」の中で萎えてしまっているのに気付く。「ふふむ」の力強さは、直截的に「一目」と言った切望に結び付くのであり、その勢いで相手に呼びかける積極的な意志へと歌は収斂して行く。そこに「ふふむ」の原体があり、家持は「つぼみ」を見せたかったのではなく、「ふふむ」桜に感応するわが心との共感を相手に求めたのである。その躍動がそのまま言葉へと融体化するのが上代の特質でもあることを考えると、「つぼむ・つぼみ」が内包する概念的・消極的な意味は、万葉の歌意を削ぐものであろう。

『万葉集』には、植物を詠んだ歌が約一六〇〇首あるといわれているが、その中に十五首の「ふふむ」の例がある。のみならず、

先にふれたように、植物に限らず全歌を通して、「つぼむ・つぼみ」という語を『万葉集』は知らない。「ふふむ」がいかに上代特有の意味を持つ語であったかということは、上代以降、「ふふむ」が見えなくなることと相乗して示されてくる。両者のこの背反的なありようは、「ふふむ」と「つぼむ」とを同じ形象でとらえる図像的な認識から乖離し、それぞれに負っている内質に沿って認識することの重要性を示唆する。

まず、「つぼむ」の意味を明らかにしておきたい。「つぼみ」は動詞「つぼむ」の名詞化であるから、語の内質は「つぼむ」に倣うことができるであろう。「つぼむ」は、「蕾になる。花が開く前の蕾の状態である。(四段活用)」の意味、「つぼまる、すぼむ(零五段)」、「つぼめる(下二)」に働いて「狭いところにまとまっている。ひきこもっている。小さくなる。」「狭く小さくなる。また、開いているものが閉じる。」(以上、『日本国語大辞典』小学館による)などの意味を呈する。『大言海』は、「ツボ(壺)」を活用した語(自動)と説いている。辞典の解説から総じて感得される内質の特色は、内向する動きを根本とするということで、時に閉鎖的でもある。これは、「つぼみ」にも敷衍して解されるところであり、もし「ふふむ」がこれに属するのであれば、「ふふむ」は内向する意味を根本的な柱とするはずであろう。「ふふむ」を解釈するために、さらに「つぼむ」の実例を見ながら二語の方向を手繰って行きたい。

「つぼむ」の古い例は、平安時代に始まるといってよい。散文の例では、『源氏物語』「竹河巻」の「お前ちかき若木の梅、心もとなくつぼみて、」や、『枕草子』の「花はまだよくもひらはてず、つぼみたるがちに見ゆるを折らせて、車のこなたかなたにさしたるも」(祭のかへき 第三二段)など、見出すことができる。『源氏物語』は、「心もとなく」を伴うことで、若木の梅のまだ柔弱なありようを写し取る語として「つぼむ」は機能し、『枕草子』はそれよりも写實的に、花の「よくもひらはてず」にある状態が、つぼんだ「形」として観察される。右は少例であるが、紫式部や清少納言の深層にある「つぼむ(つぼみ)」は、やはり幾分の消極性を帯びた「形」であったことが見えている。「つぼむ」は、花が「開く」「咲く」に対して、対峙的な位置におかれて「つぼみ」なのである。

次に、歌集に現れる「つぼむ・つぼみ」についてみると、まず筆頭に置かれる『古今和歌集』であるが、この集には一首も見出せない。同時に「ふふむ」の例も持たないということと合わせ考えると、何か象徴的に思えてくる。「ふふむ」と「つぼむ」の交替期を想定することは難しく、また、その結果も流動的であり、ほとんど意味を持たない場合が多いが、これほど時代を区切って去と来とを明瞭なる図像のように見ることが出来る語はそう多くはないであろうから、『古今和歌集』が明示してくる無という結

果が、やはり劇的な一線であるかのような印象を与えてくる。

平安期では、『六条修理大夫集』（藤原顕季）の「ゆきのうちにつばみにけりな梅の花はるあけがたになりやしぬらん」（六六）、『大式高遠集』の「さくらばなつぼめるほどはのどけてひらけばのちのなげきをやせむ」（三三〇）と、まず一首ずつ見える（以下、『国歌大観』による）。二首の内特に『高遠集』の「ひらけばのちのなげき」は、「散る」を前提とした無常観を主想として、宗教的な香を譲し出した歌である。平安時代の末から鎌倉時代にかけて傑出してくる西行は、両期合わせた中でも「つばむ」を最も多く歌に残した歌人で、『山家集』『西行法師家集』『聞書集』に合わせて五例と、『夫木和歌抄』（藤原長清撰）に三例の収載を見ることが出来る。『夫木和歌抄』の三例は『山家集』『聞書集』と重複しており、さらに『山家集』と『西行法師家集』の「花」の歌が、若干の句に異同があるもののほぼ同歌と考えてよいが、伝承性の高い歌ということになる。これらの中には次のような詞書を持つ歌がある。

① 無量義経、三首（の内）

山桜つばみはじむる花の枝に春をばこめてかすむなりけり（山家集 一五三七）

② 法花教廿八品 序品 曼殊沙華、梅檀香風

つばむよりなべてにもにぬ花なればこずゑにかねてかをるはるかぜ（聞書集 一）

③ 曼殊沙花梅檀香風

つばむよりなべてにもにぬ花なればこずゑにかねてかをる春風（夫木和歌抄 一六一七二）

右①は、詞書に「無量義経」と記す三首連作の内の一首であるが、法華経の花に譬え、その開花の序（開経）として法華経三部署の一つ「無量義経」を「つばみ」に譬えたもので、法華経の花の開くのを今かと讃える心を歌った。②③は同歌異載である。詞書は経典によっているが、歌の「なべてにもにぬ花」特別な花、曼殊沙華は、梅檀香風、そして歌には詠まれていないが曼陀羅と共に、天から仏上諸大衆の上に雨と降り、「悦可衆心」（序品）するという花である。したがって、西行の花と「つばみ」とは仏教世界の品として高度に観念化されたものと見ねばなるまい。『山家集』（二四五）、『西行法師家集』（四五）、『夫木和歌抄』（二七二九〇）に、「かたばかりつばむと花を思ふより」と見えるが、これら花の「蕾」の表現を「形」から入って行く一つの道筋も、あるいは経典から授受した結果である可能性が高い。しかし、仏果の讃としての想念の世界で、「つばみ」は和歌の中に自らを主体化することはない。

鎌倉期には他に、『拾玉集』(慈円)「色にいづるそのありさまはかねてよりさくべき花のつばまぬぞなき」(二七二六)、「山桜ころにふかくそめつればつばむよりこそ色は有りけれ」(三七八二)、また、『秋篠月清集』(良経)「つばむよりちるべきいろのものはあらしにはなはやどるなりけり」(二五二七)、『万代和歌集』「しろたへのはなのつばみをめにかけていそしのみねをおりぞわづらふ」(一九七 俊頼朝臣)など、明らかに色覚が加わってくるが、これも背景に仏教思想があると見れば、「つばむ」にそこはかとなき愁思の憂がある。

鎌倉期では、さらに『夫木和歌抄』に、先の西行の三例を除いて他に「つばむ」が三例見られるが、その中に万葉歌が二首ある。『万葉集』は「つばむ」を持たないので、この二首は伝承の過程で言い替えられたと考えるのが妥当であろう。

- (1) 山こえてとほつのはまの岩つつじ我がくるまではつばみて有りまて (二二〇九 題しらず 万七 読人不知)
- (2) つばめるといひし梅がえ今朝のあしたふりしあは雪にあひてさかむかも (六六二 梅歌中 万八 大伴宿称村上)

右がそれであるが、いずれも『万葉集』に同じ歌が載るもので、『万葉集』では(1)は、第五句が「含^ふみてあり待て」(巻七一 一八八)、(2)は第一句目が「含^ふめりと」(巻八一 一四三六)と歌われている。右の内特に(1)の歌が好まれて伝承されていたようで、平安期の『古今和歌六帖』にも取載されている。その歌は「やまこえてとほつのはまのいはつつじ我がくるまくにふふみてありまて」(四三二一)と、万葉歌と同じ「ふふむ」を持っている。このことは、万葉歌との重出歌が全体の四分の一を占めるといふ『古今和歌六帖』の性質にもよるところが大きいと考えられ、『万葉集』の歌に近い形での伝承があった結果と見てよいであろう。

『夫木和歌抄』にも「ふふむ」が一例ある。

あどもへるあじくま山のゆづるはのふふまるときに風吹かずかも (一四〇四五 題不知 万十四 読人不知)

語に、『万葉集』とは若干の異同があるが、まぎれもなくこれは巻十四の東歌(三五七二)である。以上、原歌の「ふふむ」が「つばむ」に言い替えられているのが二例と、「ふふむ」のままのが二例あるのを見たが、平安期でも鎌倉期においても、「ふふむ」は右のように『万葉集』の歌の伝承上にもみ残されている語であった。「ふふむ」が万葉古語として、「つばむ」と分たれるものであったことが分る。

平安期に入ってから、「ふふむ」は「つばむ」と交替し、「ふふむ」は消滅の道を辿り、「つばむ」は特に鎌倉期に入って、大きく広衍して行った。その背景には、仏教思想による誨誘の、穏やかな観念の「形」が求められていたことを思い見るのである。しかし、上代語としてしか形跡を残さずに、「ふふむ」は何故消滅してしまったのであろうか。「つばむ」と相入れずに場所を譲渡し

てしまった右のような事実直面するとき、「ふふむ」が抱え持ったまま幽蔽した古代語の真意を、あらためて考えさせる強頑な万葉力に出会うのである。

『万葉集』にある「ふふむ」十五例（巻十四―四三八七 東歌の「ほはまれ（ど）」を含む）を、既出の歌も含めて挙げると次のような歌々である。

- (一) 春雨を待つとにあらしわが屋戸の若木の梅もいまだ含有（巻四―七九二 藤原朝臣久須磨の来報へたる歌二首 の内）
- (二) 春日野に咲きたる萩は片枝はいまだ含有言な断えそね（巻七―二三六三 寄花）
- (三) 含有と言ひし梅が枝今朝降りし沫雪にあひて咲きにけむかも（巻八―一四三六 大伴宿祢村上の梅の歌二首 の内）
- (四) 白雲の 龍田の山を 夕暮に うち越え行けば 滝の上の 桜の花は 咲きたるは 散り過ぎにけり 含有は 咲き継ぎぬべし 彼方此方の 花の盛りに 見えねども 君が御行は 今にしあるべし（巻九―一七四九）
- (五) 山越えて遠津の浜の石つつじわが来るまでに含みてあり待て（巻七―一一八八）
- (六) 春さらば散らまく惜しき梅の花暫は咲かず含みてもかも（巻十一―一八七二）
- (七) 春山は散り過ぎぬとも三輪山はいまだ含めり君待ちかてに（巻九―一六八四 柿本人麿舎人皇子に献れる歌二首 の内）
- (八) 吾妹子が如何にとも吾を思わねば含める花の穂に咲きぬべし（巻十一―二七八三）
- (九) 十二月には沫雪降ると知らねかも梅の花咲く含めらずして（巻八―一六四八 紀少鹿女郎の梅の歌一首）
- (十) 何ど思へか阿自久麻山のゆづる葉の布敷麻留時に風吹かずかも（巻十四―三三七二）
- (十一) 卯の花の咲く月立ちぬほととぎす来鳴き響めよ敷布里たりとも（巻十八―四〇六六 四月一日に、掾久米朝臣広縄の館にして宴せる歌四首 の内）
- (十二) わが背子が古き垣内の桜花いまだ敷布売利一目見に来ね（巻十八―四〇七七 越中国の守大伴家持の報へ贈れる歌四首 の内）
- (十三) 梅の花咲けるが中に布敷売流は恋や籠れる雪を待つとか（巻十九―四二八三 五年正月四日に、治部少輔石上朝臣宅嗣の家にして宴せる歌二首 の内）
- (十四) 布敷売里し花の初めに来しわれや散りなむのちに都へ行かむ（巻二十一―四四三五 防人を検校する勅使と兵部の使人等と、同に集ひ飲食して作れる歌二首 の内）

(註) 千葉の野の児手柏の保く麻例どあやにかなしみ置きてたか来ぬ(巻二十四三八七 右の一首は、千葉郡の大田部足人)

以上であるが、見る如く、「ふふむ」は歌の主体としてあるいはそれに直結した位置で歌全体の形成に係りながら、いとも伸びやかに躍々と歌われている。

「ふふむ」は、「裏・包・銜・含・哺」で表記され、意味はクルム、ツツム、口の中に持つ、含む等と同じ(『大言海』参考)というの一般的な語原説明となっていた。北村季吟『拾穂抄』が「くゝめり」と訓んでいるように、旧訓は「ク、ム」と訓んだ。先に触れたが、契沖は「ク、ム」も「フ、ム」の古語で同義語と認め、その上で花などには「フ、ム」と言ったという。岸本由豆流『万葉集攷證』が「心に物をたくはへおくを、^{フクミ}含て居るといふごとく」であるといい、「俗言に、つばむといふに同じ。」として、平安期以降の「つばむ」を俗言であるとしている。但し、上代に「つばむ」という俗言があったか否かは問題である。真淵は『語意考』において、十二月の名の内の七月について、「布美月」は「保布々^{ホフ}美月^ミ」の上下を略した言い方だとし、「稲は七月に穂を含めり万葉に布久むをば布々万里と云を布々と畧き又ほとのみもいへり」と説いて、古代性の強い解釈をしていて興味を覚えさせるが、『万葉集卷七之考』の解には「ふゝみてとはふほまりと云に同じくつほみてあれなり」と「つばむ」に帰して、その興を失わせる。江戸期は平安・鎌倉よりもさらに上代に遠く、「つばむ」がすでに常語であったことを考えれば、「ふふむ」が自立性を失うのは自然な結果であったのかもしれない。松岡静雄『新編日本古語辞典』には、「フフミ(蒼)(銜)」を「ホ(穂)ミ(見)の疊頭語ホホミの音便」化と見て、後に「フクミ」と転呼されたと説いている。

『万葉集』の「ふふむ」の歌十五例は、時代的には柿本人麿から大伴家持までを広く被覆しており、用例としては後期に集中する。また、作者不明歌群にも存在するから、歌語といった類の雅語ではなかったように思われる。(+)や(註)の歌には「ゆづる葉」「卯の花」「児手柏」のような、あまり目立たない小花を持つ樹木を含む。そのこと自体がすでに後世の和歌の「花の蕾」とは異なるニュアンスを呈しており、さらに(註)共に東国の歌である点が、いわゆる文芸的意趣から出たのではないことを示す。ゆづる葉、児手柏は靈性を湛える木であり、『万葉集私注』が「(ゆづり葉の)若芽の芽ぐむ時」「(このてかしはの)その芽の未だ開かぬを」といい、『万葉集注釋』が「(このてがしはの)その葉のまだ開いてゐないのを」と明言するように、「ふふむ」は「葉」にかかっている可能性が高い。『万葉の歌ことば辞典』(有斐閣選書)にも同様の説明が付されている。右の樹木の葉が「ふふむ」という表現は、花によりも一層神秘的に観じられ、呪の古代が生きているような語感がある。これらに未婚の乙女が比譬されていると見る説

『代匠記』、折口信夫など）があるが、葉の「ふふむ」状態に、乙女の忌み籠りの期間を暗示する霊的意味を読み取る解釈ができることは啓示的である。

右の十五首の「ふふむ」の内質に係る言語は、特に平安・鎌倉期の「つぼむ」から立ち戻った時、寛容なる挑発に直面し、一瞬気圧されるのを感じる。(二)「言な絶えそね」、(四)「咲き継ぎぬべし」、(五)「あり待て」、(六)「含みてもがも」、(七)「君待ちかてに」、(八)「咲きぬべし」、(三)「一目見に来ね」、(三)「恋や籠れる雪を待つとか」の命令、断定や願望の口調で「ふふむ」に直接間接的に作動する語調は、きわめて対偶的で、生物体を相手とするような生き生きとした表現を見せている。特に「待つ」に観想される「ふふむ」は、そのさらなる能動的なありようとして「いまだ」を伴い、「ふふむ」が一定の「時空」の概念に置かれていたことを想像させる。

「ふふむ」と「待つ」との関係は、「つぼむ」にない独特の比重をもって歌にあらわれる。たとえば(三)「恋や籠れる雪を待つとか」は、「梅の花咲けるが中に含める」ものに対して言っており、開いた花との無碍の対比、あるいはそれ以上の自由な着想に彩られているのである。(八)のような、恋人と想っているあの娘が自分のことをどうとも思ってくれないので、「含める花の穂に咲きぬべし」と歌ったのを、普通のように「情が激しく表にあらわれてしまいそうだ。」(講談社文庫本『万葉集』)と解釈するよりも、「含んで待っていないで――開花の時を待っていないで――もう花に咲いてしまいそうだ――待っていない。待っていても仕方がない。」という気持を解釈する手立てが残る。

時空の概念をとる「いまだ」を伴った「ふふむ」に戻ることにする。「いまだ」という語の集中の使用例は五十八例と多く、その内の約八割にあたる四十六例は下に否定を伴って、「いまだに、今までにまだ(何々)ではない」と表現され、これが通常のあり方として認められる。否定を伴わないものが十二例あるが、この内の四例が「ふふむ」の場合であって、この数字はやはり注目しておくべきであろう。「ふふむ」以外の八例と比考してみると、そこにまた新たな徴証が加わり、「ふふむ」の特殊性が浮き彫りにされてくる。「ふふむ」以外はたとえば「粟島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門波いまだ騒けり」(巻七―二〇七)、「暁と夜鳥鳴けどこの山上の木末の上はいまだ静けし」(巻七―二六三)、「三島昔いまだ苗なり時待たば着すやなりなむ三島菅笠」(巻十一―二八三六)のように、想定されるある結果に対して現時点での状態を報告的に述べるもの、また、「霍公鳥待てど来鳴かず菖蒲草玉に貫く日をいまだ遠みか」(巻八―一四九〇)、「妹が門入り泉川の常滑にみ雪残りいまだ冬かも」(巻九―一六九五)のように、ある状態を提示した後に結果として推測されるもの。さらに、「月数めばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか」(巻二十一―四四九二)、「雪見ればいまだ冬なりしかすがに春霞立ち梅は散りつつ」(巻十一―一八六二)のような、現況を客観的事実として提示

しておくものなど、補助的な位置にあるのがその主たる任務である。これに対して「ふふむ」の場合は、(一)「いまだふふめり春雨を待つとにあらし」、(二)「いまだふふめり言な絶えそね」、(三)「いまだ含めり君待ちかてに」、(四)「いまだふふめり一目見に来ね」と、「いまだ」のかかる「ふふむ」は歌の中の主部として働いており、そこから推測されてくるもの、詠うものの意味が立ち上って来る。「いまだふふめり」が歌の構成上、重要な発起点となっているのである。この形は、「ふふむ」が受身的に何かの結果なのではなく、原因として積極的に機能していることを示す。それは、動詞「ふふむ」があたかも生物体でもあるかのように、「時空」を得て主体化しており、寛容な挑発はまさにこの主体化によって得られたものであって、「ふふむ」の外向的積極的内質なのである。

冒頭でも触れた大伴家持の歌、(五)の「わが背子が古き垣内の桜花いまだふふめり一目見に来ね」は、「待つ」語はないものの、初花の開く瞬間(時)を見せたいからという思いがあり、(五)「山越えて遠津の浜の石つつじわが来るまでに含みてあり待て」も、石つつじの初花の開花の時に会いたいという意味での「待て」である。(六)「春山は散り過ぎぬとも三輪山はいまだ含めり君待ちかてに」にしても同様に、一般の春山ではなく、神の山三輪山の初花の開花をこそ、君は今や遅しと耐えて待っているのが「ふふむ」である。『古今和歌集』に「山ぶきはあやななきそ花見むとうゑけむ君がこよひこなくに」(春哥下 一二三 よみ人しらず)という歌があるが、『万葉集』ならば、「あやになさきそ」と歌わず、「ふふみてあり待て」と表現するところであろう。「ふふむ」を持たない『古今和歌集』がいみじくも示唆しているように、「ふふむ」は「待つ」という時空を内包する故に、そこにはまた、萌芽する生命が籠っていると観想されていたと考えることを許容する。(七)の「ふふめりし花の初め」、すなわち「初花」への万葉人の憧憬はその生命の開く瞬間への感動に基くものであり「待つ」は初花の開く時までのすなわち忌み籠りの期間で、この解のもとにあって、初花を「ふふむ」といった表現が生きてくるであろう。(八)(九)(十)を見ると、「ふふむ」は雨、雪、風を待ち、それらに会って初花を開くと考えていたようである。こうしたあり方からは、家持が「ひさかたの雨は降りしく石竹花がいや初花に恋しきわが背」(巻二十一 四四四三)と歌った事情がよく汲み取れる。雨に会って、まさにふふんでいた石竹花が初花を開くその「時」の感動が、大原真人今城にあてた尊愛の思いであることを伝えている。

枕詞「若草」を、神話物語的な時空を背景とした幻想的な姿ととらえ(『万葉思ひ草 十 若草、和草幻想 一』『学苑』第八百二号)、「和草」と古事記歌謡の「葦草」(沼河比売歌謡)とは同一線上に立つ観想であり、意味は年若い乙女と成女との間の境界領域で忌み籠ってその時の到来を待つ女性を譬えると述べた(『万葉思ひ草 十一・十二 若草、和草幻想 二・三』『学苑』第八百

四・八百九号)。「和草」「萎草」を一般に解するようになよした草の意とすると、時空を孕む古代語の生命が断たれる。「和」あるいは「萎」といった語でさえ現代とは異なる意味で、能動的、生命的に観じた古代人が、「ふふむ」という動詞を同じ語彙範疇に置いた可能性は大であり、むしろ自然である。

「つぼむ」と「ふふむ」とを見通してみると、明らかな違いは、「つぼむ」が「形」から入るのに対して、「ふふむ」は「時空」の觀念に立つことである。仏教で最高位の花宝蓮華は、仏教美術の中で形象化された美の極地を現す。時代が一気に下るが、「ひらいた ひらいた れんげの花が ひらいた ひらいたと おもったら みるまに(いつのまにか) つぼんだ」という唱歌がある。子供達が輪になって、広がったりつぼんだりする遊戯であるが、まさに蓮華の花は朝に開き夕につぼむ、輪廻の花である。その蕾は薬師仏の御手に提げられ、衆生の苦しみを救済する仏の花である。「ふふむ」には輪廻がない。前方を見据え、絶えず蠕動するのである。

折口信夫は、(+)「何と思へか阿自久麻山のゆづる葉の布敷麻留時に風吹かずかも」の「ふふまる時に」は、「まだ結婚期に達しない處女の比喩に用ゐたのだ。」(『折口信夫全集第十三卷』『東歌』中央公論社)と解釈している。この解釈は、「ふふむ」の古代觀想を照らし出している。さらなる意味の溯源は、『古事記』『日本書紀』にある。

つづく